
哀、嘆き唄。

劉悸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀、嘆き唄。

【Nコード】

N0366D

【作者名】

劉悸

【あらすじ】

失ったあの日から、何かが変わった。前を向けない弱さと消極的な思考。未来を絶望としか思えない、孤独と恐怖。嘆きに支配された心が、叫びを伝える。

序章

泣きじゃくる声が脳髓に響いた。
見に覚えがある光景。

ああ、また此の夢か。

部屋の隅で自らの身体を抱き締め、哀しみに耐え切れず涙を流す少年。

未だ幼い頃の、自分。

なんとか涙を堪えようとしているのだろうが、如何にもならず、余計溢れ出てくる。

身体の震えを抑えようと、必死に身体を抱き締めている。

そして、壊れた。

自我を制御出来なくなつた自身は、叫び、涙を流し続けるのだつた。

一話

「つてえ…」

額を押さえた。

定期的にみる、あの夢の所為で頭痛が酷い。

あのことを忘れさせまいと、脳が働いているのだろうかと思う。
だとしたら余計なことだ。

夢でみなくとも、思い出しくなくとも、しっかりと深く刻み込まれている。

いつだって頭の隅に残っているのだ。

カーテンの隙間から、日光が射す。

皮肉なほどの晴天だ。

苦しみ嘆く人間の気も知らず、迷いのない光は、彼等にとっての絶望でもあるのに。

がりがりと頭を掻きながらベットから出る。

カーテンを開け、その日光を部屋に入れた。

室内はすっきりしている、というより必要最低限な物しか置いていない。

物が捨てられない、という気持ちを彼は理解出来なかった。

彼は過去に執着することが嫌いだった。

故に、室内にはパイプベットとデスク、それとノートパソコン一台のみを置いてある。

少くせのある黒髪を手で雑に梳かした。

嫌な予感がする。

頭痛がそう告げていた。

彼の名前は一之瀬真央。

真央は今年の春から近所の高校に通う、極普通の高校生。既に入学してから一ヶ月が経った。

なんとなくこの生活には慣れてき始めた頃である。

通っている高校の偏差値は、そう悪くは無い、中の上と言った所だろうか。

真緒の自宅から一番近い高校がそれだっただけで、単に通い易さで選んだのだ。

今日も、ただ無心に通学する。

+ + + +

他愛のない挨拶が交わされている。

欠伸をしながらその横を通過していく。

入学してから一ヶ月が経つが、何度か言葉は交わしたことがある生徒はいるものの、友人と呼べる存在を作っていなかった。

わざわざ、自ら話しかけるなんて真央には有り得ない。

そこまでして人と関わろうとする気は昔から持ち得なかった。

校舎は三階建てで、築百何十年と真央は聞いた覚えがあった。

生徒等は一階に二年、二階に一年、三階に三年という意図が掴めない割り当てだ。

もうひとつの棟には職員室や音楽室と、どこにどの教室があるかは真央は未だ把握していない。

一クラス二十六人編成で、一学年八クラスまである。

真緒は一年七組。

西の昇降口から入ってすぐの階段を上がると、教室は目の前にある。別のクラスから、中学校からの知人なのだろう、数人でたまって話している。

真央と同じ中学から入学している生徒もいるようだが、良く判らない。

判っていたとしても、関わっていないだろうが。

「まーおー君っ！」

席について早々、声がかかる。

誰だかは判っているので特に驚いた反応をするでもなく、素っ気無く言い放つ。

「朝から元気だな」

「ははんっ、それが取り柄だからな」

日光に照らされ金色に輝く髪が、さらさらとなびいた。
偉そうに胸をはっている。

彼の名前は草凪悠斗、真央とは中学校からの唯一の友人である。

「朝から眉間にしわ寄せちゃって、苛々してるのかー？」

つんつんと、悠斗が頬を人差し指で突く。

「余計な世話だ」

「だから周りが怯えて近付いてこないんだよ」

「好都合だ、ついでお前も近付いてこなくて良いんだがな」

「何言ってるんだよ、俺等親友じゃんっ」

「誰がいつそんな事言った、お前が思ってるだけだろ」

「うわっ、今日も朝から絶好調」

突くのを止めようとしないので、腕を掴み、退けさせる。

「朝から頭痛すんだよ」

「頭痛つて…またあの頭痛？」

真央は多分、と呟く。

登校中、嫌な予感は段々と増してきていた。

「きっと校舎の中のどこいっかだろうな」

直後、ずきりと強烈な痛みが襲う。

恐い、嫌だ、という不安を纏った声が脳内に響いた。

真央は顔を歪め、後方を振り返る。

先ほどまで雑談でわいていた教室は静まり返り、生徒達の視線は、
たった今教室に到着した女子生徒に向けられていた。

入学式を終え数日経った以降、一度も教師へ姿を現さなかった、結
崎綺という生徒に。

その声は紛れもなく、彼女からのものだった。

二話

自らにクラスメイト全員の視線が注がれている。それでなくとも、ここに来るまで相当の嫌気がさしていただろうに。この所為で、出来ることなら走り去ってしまいたい、そう思っているだろう。

下唇を噛み締めながら、自分の席までなんとか移動する。

同時に、それぞれ何事もなかったかのように動き始める生徒達。

真央は、視線を元に戻し、目を伏せた。

帰りたい、こっちを見るな。

どんどんと彼女の悲痛な叫びが流れ込んでくる。

「もしかして、結崎さん、とか？」

こそつと耳打ちをしてきたので、頷き返した。

「暫く来てなかったけど、なんかあったのかな」

「何もなきゃこんなに反応してねえよ」

「…どんなこと思ってる？」

「帰りがつてるな、それと…皆消えろとか、な」

「うわっ、まじかよ」

「そんなもんなんだよ、お前は単細胞だから判んねーだけ」

そのうち原因は判るだろう。

単細胞発言に怒り、隣でぎゃあぎゃあ騒いでいる悠斗に軽い蹴りをいれる。

「あれー、綺麗じゃん、久しぶりー」

「え、来てたんだ、おはよう」

来るな、見るな、どこかに行け。

「お、おはよう」

「なにー、何で休んだの？」

「あたしたち寂しかったんだからね」

真央は、目を細めた。

早速、原因がやってきたようである。

登校してきた女子生徒数人に囲まれている綺は、ぎこちない笑みで言葉を交わしている。

心の中は、拒絶の言葉で溢れているようだが。

作り笑いは、見ていて気分が悪い。

そのうえ、こんなに感情が流れこんでいては、見て見ぬふりなど出来なかった。

「俺のどこが単細胞だよ、言ってみろって、って…おい真央?!」

逃げたい、逃げたい、早くどこかに行つて。

皆消えれば良いのに、皆死んじゃえ。

「なあ、ちよつと良い？」

女子生徒の間に割り込み、無表情でそう問うた。

いつもなら無口で静かな真央が、自ら進みでて声をかけていたことにも驚いたのだろうか。

その相手が綺ということで、余計にそれは大きくなったのだろう。

「え…、綺に、用が有るの？」

「そう」

綺は突然の事に動揺していた。

それは表情に表われていたし、真央の中にも流れ込んできている。動揺しているのは綺だけでなく、隣の女子生徒達もだが。

どうして良いのか判らず混乱している綺に気付き、真央は返事をもらう前に、その手をひいた。

綺は焦ったが、されるがまま、真央について行くことにした。

「ああつ、真央、俺も行く!!」

お前はこなくても良いのに、寧ろ来るなよ。

なんて思ったが、言えば言ったで五月蠅いので構わず放っておく。教室からだんだんと遠ざかることに、頭痛が治まり、響いていた叫びたちも聞こえなくなっていた。

+ + + + +

人気のない場所が良い。

そう考えると、必然的に校舎内では屋上に限られてしまった。

真央は綺をつれて、悠斗は勝手についてきているので省き、屋上まで行く。

頭痛が治まったおかげで少し身体が楽になり、いつもの調子を取り戻しつつある。

「えっ、あ…あああ、あああああ」

「…んだよ」

「どっ、どこまで行くんですか？」

拳動不審な喋り方だった。

相手が真央だからかそれとも他もこんな感じなのか、どちらなのだが知れないが、質問には応える。

真央よりもずっと小さく細い身体、痛みのない真っ直ぐな黒髪。元から小柄なのだろうが、少し頬がこけている。

「屋上」

「うつわー真央、やらしー、そんな所に女の子つれこっ」

言い終える前に手加減せず蹴りをいれてやった。

丁度、階段だったので転げ落ちる悠斗。

それに驚いた周囲の生徒たちの意識が、階段から転げ落ちた無様な悠斗に向けられていた。

「だっ、大丈夫ですか…??」

「うわ、悠斗じゃん、何落ちてるんだよ、だっせー!!」

「うるせえっ、真央が蹴ったからバランス崩したんだよ!!」

その張本人は、何事もなかったかのように屋上に向かっていた。

「なっ…謝りもしねーのかよおお!!」

真央に纏わりつき、学習能力が無いのか、毎回余計な事を言う悠斗。このように蹴られたりすることは、日常茶飯事なのである。

三話

階段から転げ落ちた悠斗は、わざわざ屋上までやってきて真央の隣に座っていた。

何であれから教室に戻らずここにやってきたのか、真央は不思議でならなかった。

まあ結局、ただの馬鹿だということだろう。

放っておいて話を切り出そうと、そう思い、綺の目を見るが。瞬間的に、視線をそらされる。

「…何で目えそらすんだよ」

「そりゃー、やっぱり真央の目つきが悪いからだよって、言ってるそばから睨んでんじゃない」

これは無意識だ。

どうやらくせだったらしい、だが直そうとは思えなかった。

恐い。

と、また綺の心の叫びが聞こえる。

対人恐怖症なのだろうか。

正座をし、真央と悠斗と目が合わないよう視線を膝に落としている。落ち着きがなく、どこか警戒心もあるように見えた。

「なあ、そんなに人間が恐いわけ？」

びくり、と綺の身体が震えた。

そして、小声だが確かに違いますと、否定の言葉が聞こえる。悠斗が真央が恐いんじゃないかと言ったが、これは無視する。

そんな態度をとっているつもりはない。

「でもさ、はっきりと聞こえるんだけど、恐いって」

「…聞こえるって、何がですか？」

「あんたの心の声」

綺はきよとん、とした。

それもそうだ。

いきなり、貴方の心の声が聞こえます、なんて言われたって世界中にいる人間、何人が信じるだろう。

真央自身、前後なくそんなことを言われても、絶対信じない。だから綺の反応は正しいと言える。

ここからどうやって納得させるかが問題だった。

「と言っても全部が全部聞こえるわけじゃない、嘆きの部分だけだ」

痛みや哀しみ、嘆きが有る程度の度合いを超えた時、真央にはそれが聞こえるようになる。

ただ怪我をして痛いとか風邪で苦しいとか、そういうものは聞こえてこない。

聞こえるとはこの場合、脳内に直接波紋のように広がり伝わってくるからだ。

「ある種の超能力とでも考えてくれれば良い、ただ俺にはあんたの嘆きが聞こえたから、それを訊いただけだ」

「じゃあ、教室でのことも全部聞こえてたんですか？…？」

「あんたが教室に入ってきてからのことはな」

信じられないなら言い当ててみようか、そう問う。

しかし、綺は首を振りそれを拒否した。

「色々な理由があつたんだろうとは思う、原因は朝あんたの周りにいた生徒だろうって予想もしてる」

何があつたか、なんて質問はしない。

思い出したくもないだろうし、それを語れなんてのは拷問に近い。真央が同じ状況に立たされたなら、きっと同じ気持ちになるだろう。

「結崎さんさー」

と、前ぶれなく悠斗が口を挟む。
真央は顔をしかめて悠斗を見た。

「そんながちがちにならなくたって平気だよ、皆が皆敵じゃないんだからさ」

能天気な考え方だった。

今の綺の状態じゃ、絶対にそんな考え方は出来ないと思う。
良い意味で前向き、悪い意味で馬鹿な考え方。
そこが悠斗らしいと、真央は感じる。

「何かあつたら真央が一発かましてくれるって！」

「どうして他人任せなんだ、自分でやれ」

「そんなこと言って、このツンデレめー」

「黙らないと屋上から突き落とすぞ」

「…兎に角っ、もう独りで悩んでなくても良いんだぜっ、出来ることがあつたら何でもするからさ」

悩みひとつないような笑顔で、悠斗は言った。

そんなことで綺の不安が消える事はないのに、否、だからこそ近く

にいる人間は笑っていなければならないのかもしれない。

安心出来るように、不安にさせないように。

当の綺は、啞然としていた。

何が起きているのかいまいち把握しきれてないようで、どうして良いか判らないらしい。

「俺、草薙悠斗、こつちが一之瀬真央ね」

宜しく、と悠斗が手を差し出した。

綺は慌ててその手を握る。

「よっ、宜しくお願いしますっ」

初めて握手なんてした。

先ほどのまでの挙動不審な態度は消え、目には光が宿り、綾は別人のような表情をしていた。

四話

「でさー」

握手を終えた直後、悠斗は早速というようにいそいそと綺に話しかける。

誰にでも変わらない態度で友好的な悠斗の性格は良いと思う。

「どうして敬語なわけ？」

「えっ」

「だって同級生だろー、くせなのかなって思ってた」

俯く綺の頬が妙に赤い。

恥じているらしかった。

そういえば先ほどから敬語だったなと、思う。

あまり気にとめていなかった。

「あ、焦ると敬語になっちゃって、本当はこんなんじゃないのにつ」

「へえー、そっか緊張してたんだね」

「…それってさー」

「ん、どうしたよ真央」

「ああー…やっぱ良いや、悪い」

ただの推測に過ぎない、と思い発言するのを控える。

わざわざ問いただしたってしょうもないこと。

これも、思い出したくないことかもしれない。

「こいつたまに変なこと言うけど気にすんなよー」

「やっぱりここ突き落とそうか」

「あ、いや、嘘です御免なさい、真央さんは凄い優しいお方です観音様みたいな人です」

「あ、あああの」

「…何？」

「二人は仲良いんだねっ」

「仲良くねーよ」

「うわっ、とことん否定すんなっ！！」

他人から見たらそう見えるのだろうか。

真央は溜息をつきながらそう思った。

+ + + + +

「おお、結崎、来てたのか…って、何でお前らと一緒になんだ」

教室に戻ってくるなり、怪訝そうな表情で担任に睨まれた。
出席をとっているところだったらしい。

怪しまれるのも無理ないだろうが、どう説明しようか真央と思う。

「よーっす藍ちゃん先生、今日も良い天気っすね！！」

「草廬は一度転生してくるべきだと思うよ」

「うっわ、教師としてその発言どーよっ」

「あー、まあ良いから座れ」

ああ、馬鹿が役にたった。

真央のクラスの担任は佐々木藍といい二十代前半の女性教師である。

藍は聞き分けが良く、そう深く追求しないタイプだった。

悠斗が一緒にいたおかげで更にそれは和らいだようである。

それより問題は綺に突っかかってくる生徒達だ。

今も真央や悠斗、綺のことを順に横目でうかがっている。

教室へ入ってから、女子生徒達の視線に気付いたのだろうか、綺は少し不安を覚えているようだ。

先ほどよりは和らいだようで、声は聞こえなくなっている。今日は様子をみようか、そう考えた。

「結崎は後で職員室に来るように」

「は、はい」

「それと、一之瀬も一緒に」

「…はっ？」

「返事はいだろう、一之瀬」

「…はい」

何で俺まで一緒に。

不満そうな表情を浮かべていたのに、教室にいる何人が気付いたのだろうか。

+ + + + +

さっさとして行って済まずぞ。

そう促して、綺を連れ職員室まで行く。

呼び出しをくろうようなことをしたはずはないのに。

向かう途中までに、かなり周囲の生徒の視線を感じた。

「お、来たな」

「何すか、俺変なことしてないと思うんですけど」

「一之瀬え、そんな挑戦的な態度だと皆敵にまわるぞー」

あつはつはつは、と笑い飛ばされる。

絡みやすい教師として藍は評判が良いが、真面目に話したいときにこんな態度で接せられたらきつと苛つとくるだろう。

「まあお前はちよつと待つてろ、先に結崎」

「俺ここにいて良いのか？」

「ああ、差し障りのないことだからな」

差し障りないことなら教室で話せば良いものを。

わざわざ職員室まで呼び出しているのだから、そんなことないだろう。

自分も一緒に呼ばれたことに意味があるのではないか。

まあ、何にしる聞いていれば判ることだが。

「久しぶりだな、少しは休めたか？」

「はい、ちよつとずつ回復してきました」

「そうか良かった、今日も無理するなよ、気持ち悪くなったら黙ってないでちゃんと言え」

「あ…はい」

「うん、そう例えば一之瀬とかに、なあ一之瀬っ」

「…は？」

「だから返事ははいだつて言ってるだろ」

こちらを見て微笑んでいる、藍。

何故自分なのだろう、もしかしてその為にここに呼んだのだろうか。自分でなくとも良いのではないか、駄目だしたら自分でなくてはいけないのだとも言いたいのだろうか。

不本意だが、形だけの返事をした。

「よし、それじゃ結崎戻って良いぞ」

「はい、失礼しました」

綺が職員室を去るのを見届けてから、藍は真央の名を読んだ。

綺と会話していたときのトーンと明らかに違う声のトーンで。

「結崎を、頼むぞ」

どうして。

どうしてそんな真剣な顔で自分に頼むのだろうか。

真央はなんと返せば良いか判らず、ただ黙ってしまった。

五話

脳内で色々なことが駆け巡っていた。

今日起こった出来事を整理したいが、どう纏めて良いか判らない。考えようとするのだが何故か上手くいかない。

その所為で、ぼうつとしてしまう。

「おい、真央、聞いてるかー」

「っ、ああ…凜さん…」

「…お前、今どつか吹っ飛んでたろ」

「あー、ちよつと考え事を…」

そうだった、今は凜と一緒にだった。

真央は頭を掻き毟る。

「悩んでるなっ、青春青春」

「嬉しそうに話してますけど、凜さんもまだ十分青春じゃないですか」

「っは、俺のは灰春だぜ、ってか既に春じゃねーな」

向かいに座っているのは、時雨凜。

近所に住んでいて、小さい頃からの付き合いだった。

同時に真央の尊敬の人である。

性格が良く、色々な面で人として優れていると思うし、こうなりたいたいも思っていた。

そして真央の能力のことを知っている内の一人である。

今は、真央の自宅。

学校終了後、凜は真っ直ぐ真央の家へやってきた。

凜は真央と同じ高校の三年生で、たまに真央の家へ遊びにくるのだ。

今日は一緒に夕食を食べることになっていた。

「んでー、なあに、恋とか？」

「そんなじゃないっすよ、俺がそんなことで悩むと思ってんですか」

「そうか、女に興味無かったもんな」

凜は長身で細身だった。

長い手足にシャープな顎、小ぶりの鼻とはつきりな顔立ちをしていて、昔から良く異性から人気がある。

最近、髪を灰色に染めたのだが、良く似合っていた。

「今日、不登校だった生徒が久々に来たんですよ」

「…へえ、それで？」

「そんで…声が聞こえて…」

ふと、凜の表情が変わったのに気付く。

真剣な目つきに目を奪われ、言葉を失ってしまう。

「真央のことだから、放つとけなかったんだな」

「えーっと…うん…」

「だろうな」

凜には、弱い。

例えば悠斗が相手だとしたら、こんなに怯まないだろう、というか怯まない。

一瞬凍りついたかのような錯覚に唇を噛む。

真央はそれを振り切り、今日の出来事を話し出した。

+ + + +

「何で…俺なんですか」

その問いに、藍はくすりと笑った。

人が真面目にしているのに、その態度に少しムツとする。からかってるのいるのか。

「何でって、朝一緒にいたじゃないか」

「だからってそんな理由にならないっ…」

「あたしが言わなくてもそのつもりだったんじゃないか？」

今年の春、しかもそれはたった一ヶ月前。

出逢ってから一ヶ月しか経っていない人間に、何が判るというのだ。

真央は睨むように藍を見る。

「結崎から、休んでいた理由、聞いたか？」

真央はその質問に首を振る。

てつきり聞いていたと思っていたが、藍はそう呟いた。

「まあ感づいてると思うけど、本人から聞くのが一番だな」

「…それは判りましたから、どうして俺があいつに手を貸すって思ってるんですか」

「そーだな…うん、女の感ってやつだ」

そう言っただけで藍は悪戯っぽく笑った。

感で託してしまっただけで良いのか、それで真央がそうしなかったらどうする気だろう。

もう戻って良いぞ、と促される。

真央は何も言わず、その場を立ち去った。

+ + + +

ざーっとこんなもんだろうか。

大体のことを正確に凜へ話した。

綺のこと、一ヶ月の不登校へ関わっているであろう女子生徒のこと、そして藍のこと。

凜は、相槌は何度かうつてくれたが黙ったまま聞いたので、どう思っていたのか気になる。

「真央は、その子が虐められてると思ってる？」

「クラスに入ってきたとき拒絶はクラスメイト全員に向けられてたけど、やっぱり叫びが強かったのはその女子生徒だったし」

多分と頷く。

それを聞いた凜は、微笑み真央を子供のことを扱うようにぐしゃぐしゃと頭を撫でてきた。

二歳しか変わらないというのに、こんな扱いをされるなんて不満だ。

「真央は偉いな」

「べ、別に偉くねえよ、人が苦しんでるのを知ってて、しかもそれが身近な人間だったただけだろ」

「ははっ、まあ良いけど、それよりも藍ちゃんは侮れないなあ」

藍は去年の凜のクラスの担任だったので、凜は藍のことを知っていた。

凜による藍の評価も中々のものである。

だから真央は入学して担任が彼女と知ったとき、学校生活に対する不安はないだろうと思っていた。

「そうだ、明日さ、その子に俺も逢いに行くよ」

「どうして？」

「真央が頑張ってるんだから、手助け出来ないかなって」

真央が返事を返す前に凜は立ち上がりキッチンへ向かう。

「さーて夕飯作るぞー」

正直、凜には迷惑をかけたくなかった。

話すんじゃないかったなと若干の後悔をしても、もう言ってしまったことだし仕方ない。

真央はそのことを考えるのをやめ、凜と一緒に夕食作りへ取り掛かった。

六話

久々の登校、数日前までには見られなかった景色が広がっていた。暗闇を手探りで歩いていたときと違う。

微かな光が目の前からさしてきて、それを見失わないように必死に歩いている。

変わりたい。

ずっとそう思ってきた。

希望を現実に変えられるように、動かないと。

綺は自室のベットにうつ伏せの状態になり、考えていた。と、耳元で携帯が鳴る。

びっくりと反応し慌てて携帯を手にとった。

「っ…」

このまま切ってしまうのか。

いや、それでは意図的に切ったとばれてしまうだろう。

ならば知らないふりをしておこうか。

だが、それだと今度逢ったときに問い詰められることになるだろう。出るしかない、そう覚悟を決める。

「も…もしもし…」

声は震えるし携帯を持つ手も震える、きつと全身が震えているのだ。しっかりしろ自分。

「あーやー、今からさ用事あるんだけど、学校までこれるー？」

思っていたとおりだった。

声を聞いただけで、拒絶反応が出る。

しかし断れる理由もないし、そんなこと言っただけで意味がない。腹を割って、行くしかない。

「あ…うん、行くね、待ってて」

「そ、じゃあ待ってるね」

行きたくない行きたくない行きたくない。

つく前に皆いなくなったら良いのに。

誰かに襲われてしまえば良いのに。

自分でも気分が悪くなるような言葉達が脳内を駆け巡る。

綺は両親に気付かれないよう、そうつと家を出た。

時刻は、21時をまわっていた。

+ + + + +

「まったく沙那の奴人づかい荒いぜーっ」

近所のコンビニからたった今出てきたのは悠斗である。

妹の沙那につかわれて、コンビニへやってきていた。

沙那がアイスを食べたいということで、悠斗もそれに賛成し、ジャンケンに負けたほうが買ってくる。

それに悠斗は負けた。

「溶ける前に帰るぞっ…と、ん？」

不意に視界へ人影がうつつた。

人通りはそんなに多い方ではないし、悠斗は野生の感に似たようなものが異常に優れているのでそういうことには敏感である。

その人影の主は見たことがあるもので、悠斗は顔をしかめた。

「…結崎さん？」

こんな時間に一人でどこへ行く気だろう。

悠斗は不審に思い、綺の姿を目で追うと、向かっている方向が学校方面であることに気付く。

どうしようかと考え、そして真央に連絡をいれようと携帯を取り出した。

数コールで真央が応答する。

真央は不機嫌なトーンで、何だよ、と。

「今さ、近所のコンビニン所にいるんだけど、結崎さんが学校方面に歩いてくの見えたんだよね」

「学校：？」

「忘れ物取りにでも行くのかなって思ったけどこの時間じゃ閉まってるしさ、変だよなって思って」

「…悠斗、結崎のこと追っつけ、今から俺も行く」

「お、あいよーっ」

真央に頼られた。

いつもは除け者なので、約に立てると思うとかなり嬉しい。

悠斗はアイスの入った袋を持ったまま、綺に気付かれないよう後をつけていった。

+ + + + +

携帯を切り、真央は上着を羽織って外へ出た。

凜が帰った後で良かったと、安堵する。

ここから学校までならすぐだ、何かあったらきつと脳内に叫びが響いてくるはず。

こんなときの為に連絡先を聞いておけば良かったと後悔した。
舌打ちをし、真央は学校方面へ走り出す。
学校へつくまで何事もなければ良いのだが、そう思った。

七話

校門へたどり着いた時、綺は一度立ち止まった。

それを見て悠斗も物陰に隠れ、綺の様子をうかがう。

顔が強張っているようだった。

真央はまだ来ていない。

綺が覚悟を決めて中へ入っていく。

真央が来るまで待とうかどうかどうするか考えようとしたとき、本人の走ってくる姿が見えた。

「今、中に入ってた」

「ん、さんきゅ」

じゃあ、と真央は告げ一人で校内へ入ろうとする。

悠斗は慌ててそんな真央の方を掴んだ。

「何で一人で行こうとすんの!!」

「もうお前に用は済んだ、帰って良いぞ」

「ここまで来て誰が帰るかっ!!」

不満そうな顔で見つめられたが、気づかなかったことにした。

そんなことでめげていては真央と付き合っていけない。

「邪魔すんなよ」

「おーっ、役立てるように頑張るぜーっ」

+ + + +

綺は重い足取りで、体育館裏まで向かっていた。

先ほどそこまで来るようにメールで連絡があった。

何をされるだろうか、何を言われるだろうかとマイナスなことばかり考えてしまう。

逃げ出したいという気持ちが次第に強くなってくるのに耐えながら足を進めるのは、かなり辛い。

そうしてあれこれ考えているうちに、ついてしまった。

暗くて何があるか判らない。

すると、いきなり光がもった。

「こんばんは、綺」

「…こんばんは」

懐中電灯が二台、生徒は三人。

女子生徒達の姿を見た瞬間、足がすくんだ。

「用って…何？」

「そうだね、もう暗いもん、早く済ませて帰っちゃおうか」

「それよりさー誰の所為でこんな時間にあたし達が来てやってるかって判ってるの？」

「ちよつと、そんな態度だと綺が怯えるよ」

けらけらと馬鹿みたいに笑っている。

雑音だった。

笑い声が話し声が、全部が綺にとっての雑音。

「ねー綺、聞いているの？」

ぐんつと髪を引っ張られた。

他人を見下し、悦に浸っている表情はとても醜かった。

こんなクズは消えてしまふべきなのに、何故生きているのだろう。

自分も何故生きているのだろう。
皆、皆、消えれば良いんだ。

+ + + +

ずきりと痛みが走ったかと思うと、次の瞬間から大量の嘆きが流れ込んできた。

あまりの痛みと嘆きに思わず足が止まる。

「真央?!」

「っ…さつさと結崎を連れてくるぞ、こんなんじゃ他のことに何も集中出来ねえ」

「ちょ、真央、顔恐っ!!」

ぴりぴりと肌が痛い。

早く止めないと、綺が壊れてしまう。

そう思った直後、胸が張り裂けそうな悲鳴が聞こえた。
間違いなく、それは綺の声だ。

「え…ヤバくね?」

「ちっ、悠斗、お前は結崎のこと頼む」

「お、おうっ」

叫び声の聞こえる方へ急いで向かう。

きつと綺を呼び出した他の生徒だろう。

綺を黙らせようとして慌てている声が聞こえた。
本当、こんな時間に近所迷惑だと真央は思う。

「おらあっ、こんな時間に何してんだっ!!」

「おまつ…っこの馬鹿!!」

やはり悠斗を連れくるべきではなかった。

体育館裏にいた女子生徒達は悠斗の声に驚いて行動を止める。

綺は真央達が来たことにすら気づいていないのだろう、叫びは止まらない。

「何で… あんた達っ…」

「お前らこそ何なんだよ、結崎さんのこと離せよ!!」

「っ… 逃げるわよ!!」

「う、うん」

真央達がやってきた方向と逆方向へ逃げだそうとする生徒達。

ここまで来て誰が逃がすか。

切れ気味な真央は生徒達の前へ回り込もうと走った。

断然真央の方が足は速いことから、逃げようとしたって本気の真央の前では敵わない。

「お前らこんなことして逃げられるとも思ってたの？」

「どっ、退いてよ!!」

「… 人の痛みを身を持って知ってもらおうか、結崎がどれほど苦しんでるか」

「何それ、あんたに綺の何が判るっていうの?!」

「結崎の苦しみ、嘆き、痛み」

叫びは全部筒抜けだ。

「悪いな、女だからって手加減しねえから」

「うーわー、真央さん御乱心…」

切れている真央のことは、止められない。

というか止めにはいったら間違いなくとばかりをくらうことになるだろう。

悠斗は最悪の事態だけは避けてほしい、と思いながら綺に近付いた。蹲り、耳を塞いで叫んでいる綺を起こし、背中を叩いてやる。

「結崎さん、大丈夫だよ」

落ち着くまで、ずっとここににいるから。

そんなに怯えなくて良いからね。

「御免なさい、謝るから!!」

「もうしません、許して下さい!!」

「…そうやって謝って済む問題だと思ってるんだったら余計に許さねえよ」

「本当に御免なさい、御免なさい」

この場だけそれで許してもらおうという魂胆が丸見えで、真央は気分が悪かった。

と言ってここで自分の気が済むまで殴ったとしても同じことだろうし。

真央は綺を見た。

悠斗が落ち着けているようで、悲鳴は止まっている。

段々と落ち着いてきているらしい。

「判ったよ…でも明日ちょっと用があるから、覚悟しとけよ」

睨んだら、本気で怯んだらしい。

怯えた表情で一目散に生徒達は走っていった。

「おー、おつかれさーん」

「ああ」

「うん、ボコボコにしないで良かった」

「俺がそうしたところでこいつの気が晴れるわけでもないからな」

「ははっ、やっぱ真央は良い奴だ」

「…何笑ってんだよ」

真央は綺を見た。

もう、頭痛はひいていたし心の声も聞こえなくなっていた。
落ち着いたし、真央達のことを認識したということだろう。

「結崎」

綺はびくりとして、ゆっくりと顔をあげた。

「…もう大丈夫だから、安心して良いぞ」

「ん、真央の言う通りだよ、真央に恐れをなしてあの子達逃げてったから」

二人の言葉に、思わず心がはじけたのか、綺は大粒の涙を瞳から流した。

八話

「御免ね、綺っ」

「う…うん」

朝一で女子生徒達を呼び出し、謝らせた。

いつも何にも興味を示さず一匹狼みたいなイメージだった真央のあんな一面を見てしまい、彼女達は真央に怯えてしまっているようだ。それは真央にとって好都合。

二度と綺に手出しは出来なくなるからである。

「昨日さー、沙那に頼まれたアイス、あの後溶けててもう一回買いに行くはめにあっただよな」

女子生徒達は謝り終わるとそそくさと教室へ戻っていった。屋上に三人だけになると、悠斗は言った。

「知るか、そんなの」

「真央ひっでえ!!」

綺よりアイスが大事、そう言っているように聞こえる。アイスなんか買いに行けば良いのだから。

「でもまあ、一件落着だなっ」

「…ああ、凜さんに話さなきゃ良かったな」

「何で？」

「結崎に逢いにくるって昨日言ってたからさ」

「良いじゃん、片付いたんだから」

「また一人で無理してって言われるんだよ…」

「俺がいたから平気だつて」

「…そうだな、お前の所為にしよう」

「ええっ?!」

衝撃を受けた悠斗は無視して、真央は切り出そうとする。

だが、最初に口を開いたのは綺だった。

「あ…ありっ…がとうございました!!」

「ん、ああ、別に良いよ」

「そうだねー、俺達が勝手にやったんだし」

「でも…」

「…じゃあ、お前とあいつ等の関係を話してくれたら許す、何の為に助けてやったかはつきりさせたいし」

真央の提案を綺は少し考えた後、承諾した。

そして語りだす。

綺とあの女子生徒達は中学生からの知り合いだった。

出逢いは中学二年のときで、クラス変えのときに一緒にクラスになったのが始まりである。

それから友人になったのだが、暫く経った頃から、綺のことが気に食わないという理由で虐めが始まった。

彼女達はあたかも自分達がやったわけではないというように振る舞い、綺もそれに気づかないふりをしていた。

受験のとき、皆で一緒に高校に行こうね、と言われ綺は断れず今に至る。

そして虐めは今まで続いていたわけだが、それも昨日で幕を閉じた。

「…何か他でもありそうなことだよね」

「そうやって人の苦しみを括るな」

「うっ、御免…」

昨日出逢ったばかりの二人によって変えられた日常。
今までの暗がりの中にもった光。

やっと切り開けた道を、曲がってぶつかって転んで、それでも挫折せずに歩いていく。

「ひ、ひとつ訊いても良い…?」

「俺?」

「一之瀬君のその…能力って、生まれつきなのかなって…」

かちんと、真央は固まった。

それを見て地雷を踏んでしまったのかもしれないと綺は焦りだす。

「…生まれつきじゃない、あんまり訊かないでくれ」

「うっ、御免なさい」

「あー、そろそろ授業始まるし戻らねえ?」

場の空気を何とかしようと悠斗は思い、二人に問いかける。

真央は無言で立ち上がり、歩き出し、悠斗はそれについていく。

「結崎さんも、行こう」

「うんっ」

暗闇から抜けたその先に、待ち受けているもの達に目を背けず、歩いて行けたら。

隠れた謎と、不思議な能力に、これからへの不安、それよりも大きな期待。

やっと、スタート地点に立てた気がする。

九話

「えー…魔王君…？」

「だーかーらーっ、爺ちゃん、魔王じゃなくて真央だって!!」

ばたばたと、ベットを叩く悠斗。

ここは病院。

悠斗の近所に住んでいるお爺さんが倒れ、数日前入院したというこ
とで真央は悠斗と綺と一緒に放課後、お見舞いに来ていた。

正直真央は、病院には来たくなかった。

色々な不安や悩みで心が弱っている人達が大勢いる場所で、嘆きが
聞こえてこなくとも肌がぴりぴりとする。

今も、その状態だ。

「ほら、真央本人が否定しなきゃ駄目だろう!!」

「あー…、魔王で良いよう」

「何諦めてんの?!」

「俺が魔王ならお前は、さしずめ家来だな」

「家来?! もーっ、ねえ結崎さんも何か言っただけだよ!!」

「ええっ?!」

悠斗はここが病院だと判っているのか。

騒がしくしたら怒られると、子供でも知っているだろうに。

そんな光景を見てお爺さんは笑っている。

六十歳とまだまだ若く、表情も元氣一杯、という感じなのだが見た
目で人を判断してはいけない。

疲れが溜まってしまっており、過労で倒れたとのことだ。

もう数日ほどで退院出来るだろう。

「そつちの子は…悠斗の彼女かい？」

「ちっ、違うよ爺ちゃん、友達の結崎さん!!」

「こ、こんにちはっ、結崎綺です」

「そうかそうか、二人とも、悠斗と仲良くしてやって下さい」

「爺ちゃん…」

「…何感動してんだよ」

「ちょ、ちょっとくらい良いだろ!!」

そんな悠斗を見て真央は苦笑した。

+ + + + +

「お爺さん元気で良かったね」

「まあ、元々元気が良いからなー、結崎さん付いてきてくれて有難うね」

あれから、綺は良く喋るようになった。

いや、きつと元はそうやって喋る子ではあったのだろう。

それがだんだんと、戻ってきたということだ。

表情も和らいできたしもう問題はないと思う。

「おい家来」

「って、何その呼び方、定着すんのやめようよー!!」

「呼び易いから」

「悠斗って言い難いか?!」

ぎゃあぎゃあわめくな。

言葉にするより、黙って睨むほうが効果がある。

きつく睨んだらすぐ黙った。

「あ、悠斗兄い」

「…うお、沙那じゃん、何しにきたの？」

病院から出た直後、入れ替わりに悠斗の妹の沙那が二人の友達をつれて姿を現した。

沙那は中学一年生で、勝気な性格をしている。

ボーイッシュな感じを漂わせる黒髪ショートヘアその表情からも活発さが滲み出ていた。

「海ちゃんのお母さんが入院してるからお見舞いにきたんだよ」

「…こんにちは」

海といわれる沙那の友達が頭を下げた。

こちらは沙那とは正反对で、静かそうなタイプだった。

少し長めの質の良い髪が揺れる。

その後に、もう一人の沙那の友達がこんにちはと挨拶をした。

「病気なの？」

「違うよ、男の子が出来たんだって」

「へえ、そっかおめでとう」

悠斗がそう言った後、海の表情が歪んだのが見えた。

祝福すべき事なのに何か嫌なことでもあるのだろうか。

そう思ったが無駄な詮索は避けることにする。

「あれ、悠斗兄いその人誰？」

「ああ、結崎さんって言って友達」

「…彼女じゃ、ないんだよね」

「ははっ何だよ、兄ちゃんが彼女出来てさびしっ…」

「そうじゃなくて真央さんの…！」

「ま、真央?!」

何故そこに自分の名前が出てくる。

沙那の視線に怯み、真央は顔をしかめた。

その隣が綺は激しく否定しだす。

その動揺ぶりを逆に怪しく受け取ったのか、疑いの目で沙那は綺を見た。

「ちげーよ、こいつとはただの知り合い」

「…真央さんが言うなら本当ね、良かった」

それで納得したのか、二人に声をかけ沙那達は院内へ入って行く。

「真央、お前モテモテだな…」

「別にそんなんでも良いわ、面倒くせえ」

「そうやって無頓着だから彼女も出来ないんだ」

「要らねえよ」

悠斗はただ羨ましがってのことなのだろうが、思わずそれに対し冷たく言ってしまう。

「そんなん、要らねえ」

言った後、悠斗と綺が啞然としているのに気づき、真央は溜息を吐いた。

「悪い、気にすんな」

「お、おうっ」

がりがりと頭をかき、真央は虫の居所の悪い表情で病院を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0366d/>

哀、嘆き唄。

2010年11月14日09時37分発行